[第６回　健康麻雀高校生大会](http://7youseikouza.tubakurame.com/high_school_cup_20170319.html)　大会参加感想文

**知るは知らぬなり、知らぬは知るなり**

雀新会お手伝いさん担当

　何かを知ろうとするとき、或いは何かを成し遂げる為に必要なものを追い求めてゆくとき、人というものはいつも、避けがたく、もどかしさを湧きあがらせるような、しかしながらそうであることによって幸せであるような矛盾に突き当たるものだ。

　その矛盾とは、すなわち知るという事その物が持つ性質である。何か知った時、同時に人はその知った事に振り回されて、沢山の不可解に悩まされることになるし、逆に何事もその真意を得る事のかなわなかった出来事から、なにがしかの大事な事を収穫することが出来たりすることもある。知る事で無知になり、知らぬということから何かを得ることがあるというわけだ。こんにちの私は、そのような不可思議な刺激に、故郷から遠く離れた上越の地で、相間見えることとなった。

　去る3月19日。新潟県は燕市、弥彦山を向こうに望む長閑な街の片隅に、ぽつりと佇む小さなプレハブ小屋。心地よい小石のかきまぜられる音がかすかに響くここ雀新会の健康麻雀教室にて、高校生たちが実力を競う健康麻雀大会が開催された。今回は第６回とのこと。

　私は今や高校生ではなく、とうに大学院の徒であり、哲学を研究する道に入った身である。茨城在住であり新潟とも縁遠かった私であったが、数年前よりネットを通じて親交を深めていたこの教室のオーナーの計らいで、新潟招待と教室来室の機会をいただき、晴れてこの大会のお手伝いとして参加することになった。

　当日の大会では参加エントリー数が２名と振るわず、そのため人数補充として教室のスタッフさんたちが入り混じって参加するかたちで大会が行われた。スタッフさんとはすなわちお手伝いさん。つまり私も入り混じって参戦したのである。

　お先に結果から言ってしまえば、私はびりっけつの惨敗であった。ウォーミングアップとして天鳳を使って雀新会のオーナーさんたちと2半荘打ったときは（偶然か）いずれも1位を獲っていただけに、その日のショックは大きかった。

　まず一つに、私は非常に悔しかった。何がって、折角スタッフの一員として参加したにもかかわらず、本大会が根幹理念としているマナールールを、私が徹底できなかったことである。天鳳位やプロ雀士といったものを目指しておらず、未だ対局経験の薄い私にとって、高順位で勝利することに対する拘泥はしようがなかったし、せめてマナーよく打とうという目標で参加したにもかかわらず、数回の指摘と罰則を受けてしまったのである。麻雀においては、アガリが近づくにつれて、作法や挙動に緊張が伴う要素が殊更に増える。他家の人達のために時間をかけない、状況が可能であることを確認する、等意識することが格段に増えてゆくため、精神的にも落ち着きがなくなってくるのである。強い精神の落ち着きを要求するこのゲームで、焦りに負けてしまったという事はまっこと悔しいことこの上ないのである。

私は高校生ではなかったし、行く前は参戦することになるとは思っていなかったから、大会にやってきてから初めてルールを知り、かつ体験したのであるが、そのなかで私の中にはいろいろな考えや感情が渦巻いていた。負ける不甲斐なさやマナー面での悔しさは勿論であるが、それよりもこの大会におけるルールが持つデザイン性に、強い納得を覚えていたのである。

　本大会のルールは、非常に良く検討され、作りこまれていると言える。昨今では赤ドラのある、いわば天鳳の赤アリ半荘ルールが一般的になっているなか、ここでは赤ドラが存在しない。また親の連荘が存在せず、尚且つ流局時等の供託された残存立直棒は、以降に立直した和了者の手元にすべて行く設計になっている。役作りによる和了のメリットが通常よりも高くなるよう設計されていて、より純粋に一般的なリーチ麻雀のセオリーを弁えた者が有利になるようにできている。それは言い換えれば、システムの特殊さに依存した勝ち方がしづらいと言う事であり、《純粋な実力勝負》をプレイヤーに訴求するに充分な仕立てとなっているのである。それが役作りを「訴求している」ことを見いだすのは容易である。流局したときの聴牌条件だ。形式聴牌がこの大会では認可されていない。それはすなわち、役作りの集中力が大前提になるようにするという思想の、確固たる裏付けである｡

思い返せばウォームアップ中は天鳳の赤有半荘でかなりドラのバックアップを通してアガっていたため、その戦略が通用しなかった私が敗陣を喫するのは必定であったのだ。これは、なるほど良く出来たゲームバランスであるといえる。このルールは、「ゲームとしての麻雀」の純粋な面白さが強調されるように構築されているわけだ。私は負けたが、このデザインの下で考えれば、まさにそれは実力差の顕れ―――天晴な敗北だったのである。

　雀新会が推奨するマナーの遵守と戦略的焦りとの葛藤は、私が今まで学んできた知識がまだ道半ばであったことと、すなわち知が無知を晒す効果を現した。いっぽうで、その不足から至った無残な敗北は、それ自身が私の与する人たちの思想の体現を理解する成果として立ち昇ってきた。この知的で不思議な出来事は、私をたんなる麻雀の敗北からくる寂寥感から解放するには充分な収穫であった。まさに私は、我が身を以て知より無知を、また無知から知を導き出すに至ったのである。これほど哲学的な体験が出来る瞬間はそうそうないものなのだ。

　人は矛盾にぶち当たることで経験し、学び、成長するとはよく言う。しかしながら、その実態は文字通り以上に刺激的である。そもそも学ぶと言う事自体が矛盾を孕んでいるのだ。そしてそれは発見し甲斐のある事である。

　あの日の燕市には、そんな宝石が出土するのだ。機会があるなら、また何らかの形でその地層たる教室を訪ねてみたいものである―――ええ、今度はもっとマナーを守りながら。